

## 『明状元図考』訳注(稿) 二

Ming zhuang-yuan tu-kao (2)

鶴成久章

TSURUNARI Hisaaki

(国際共生教育講座)

(平成二十年九月三十日受理)

今回は、巻一の周旋から費宏までを収録した。紙数の関係で、巻一の残りの部分は次回に回した。

『明状元図考』の状元図は科挙の研究書等に史料として掲載されることが少なくない。中でも、鄧洪波氏『中国状元殿試卷大全』上・下(上海教育出版社 二〇〇六)は、洪武四年科から万曆三十五年科に至るまではほぼ全ての図版を掲載している。ただ、該書の巻末の参考文献には『明状元図考』(北京中国書店)を挙げるが、鄧氏の採用した図は、万曆刊本の図を模刻した版本のものようである。前稿でも触れたように、『明状元図考』には複数の版本があり、輯録された図も、版本によって種々相違が見られる。

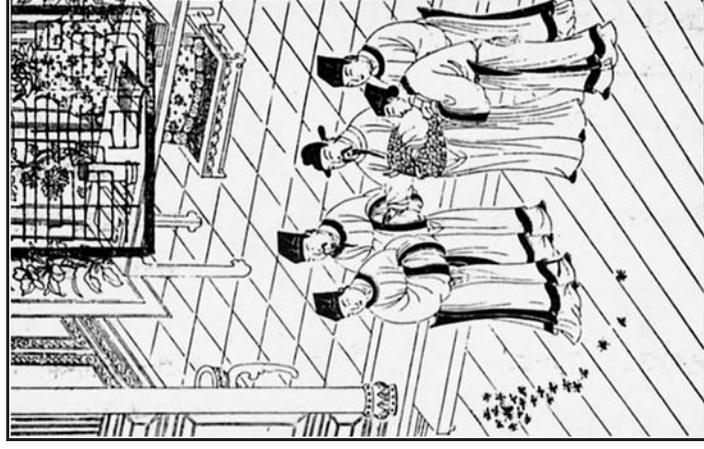
なお、鄧氏の書は、主として状元の殿試の対策の試卷を集成したものであり、収録範囲は科挙が実施された全時代を対象とする。また、試卷以外にも、関連する資料を博引しており有益である。

### 明状元圖考卷之二

#### 状元周旋

正統元年丙辰 廷試、劉定之等二百人、擢周旋第一。

按、周旋、字中規、號畏菴、浙江永嘉人。才思雄健、何冢宰文淵時知溫郡、考所作、即以狀元許之。鄉試會試皆居優列。及 廷試、大學士楊士奇以所取一甲三卷、將入殿、讀之、狀頭尚未決、問同事者曰、有識周旋否。其人儀表何如。有對曰、面白而偉。遂以旋卷首進。旋貌甚寢、陛見之日輿論悵然。蓋所問者、永嘉周旋、所對者淳安周瑄也。官至春坊庶子、同考會試以勤於事、致疾卒。温州志宣德癸丑春、溫郡守何文淵、進諸生講經於明倫堂。有群蜂夾一巨蜂飛集楹間。聲聞如雷。文淵顧謂庠士周旋曰、群蜂有巨蜂爲之主、猶士林中有巨儒爲之領袖。此來科狀元之兆也。果然。



正統元年（一四三六）、殿試に臨んだ士人は劉定之（字は主静、永新の人）等百人であり、周旋を第一位に選んだ。

考えるに、周旋は、字は中规、号は畏菴、浙江永嘉の人である。才幹勇壯で、尚書の何文淵（字は巨川、号は鈍菴、広昌の人）は、温州の知府であった時に、「彼が」書いた文章を考査して、即座に状元「の才能」と認めた。郷試と会試はともに優秀な成績を収めた。廷試の際に、大学士の楊士奇（名は寓、字が通行した、号は東里、泰和の人）は選び取った一甲の三卷「の答案」を、殿中に入って読み上げようとしたが、状元がまだ決まっておらず、同僚「の大学士」に尋ねて言った、「周旋を知っているかね。その者の風貌はどうだい。」と。「同僚は」答えて言った、「顔の色が白く堂々としている。」と。そこで旋の答案を首席として呈上した。「ところが」旋は容貌が非常に醜く、皇帝に謁見した日には人々は失望して楽しまなかった。つまりは、「楊士奇が」尋ねたのは、永嘉の周旋のことであったが、「同僚が」答えたのは淳安の周瑄（字は弘璧、号は勿菴）のことであった。「周旋は」官は春坊庶子に至り、会試同考

官として職務に従事していた時に、病にかかり卒した。

『温州志』宣徳八年（一四三三）の春、温州知府の何文淵は諸生を明倫堂に集めて経書を講じた。蜂の群れが一匹の巨大な蜂を取り囲んで「明倫堂」正面の柱の間に飛んできた。「その」音は雷鳴のように聞こえた。文淵は生員の方を振り返って言った、「蜂の群れ「の中」で巨大な蜂がその主になるのは、士林の中で巨儒がその領袖となるようなものだ。これは来科の状元の予兆である。」と。果たしてその通りであった。

【注】①郷試會試皆居優列……『正統元年進士登科録』（上海図書館蔵）の内容は、今回調査が及ばなかった。②一甲三卷……殿試では成績により受験者を第一甲（賜進士及第）、第二甲（賜進士出身）、第三甲（賜同進士出身）に分ける。第一甲は三名で、第一位を状元、第二位を榜眼、第三位を探花といった。『明史』卷七十「選舉二」に、「會試」中式者、天子親策於廷、曰廷試、亦曰殿試。分一、二、三甲以爲名第之次。一甲止三人、曰状元、榜眼、探花、賜進士及第。二甲若干人、賜進士出身。三甲若干人、賜同進士出身。状元、榜眼、探花之名、制所定也。」とある。③入殿讀之……『万曆明會典』卷七十七「殿試」に、「永樂二年定」諸舉人各就試案對策。畢、詣東角門納卷、出。受卷官、以試卷送闈封官、闈封訖、送掌卷官、轉送東閣讀卷官處、詳定高下。明日讀卷官俱詣文華殿讀卷。御筆親定三名次第。賜讀卷官宴。宴畢、仍賜鈔、退于東閣、拆第二甲三甲試卷、遂旋封送內閣填寫黃榜。」とある。④陛見……殿試に合格した進士が皇帝に謁見する儀式のこと。この間の一連の儀式は、『明會典』卷七十七「殿試」に次のように記す。「……明日、讀卷官俱詣華蓋殿、內閣官拆上所定三卷、填榜訖、上御奉天殿傳制。畢、張掛黃榜于長安左門外。順天府官、用蓋儀從、送狀元歸第。」また、拙論「明代の「登科録」について」（『福岡教育大紀要』第五四号 二〇〇五）参照。⑤問者永嘉周旋所對者淳安周瑄……つまり、旋（xuan）と瑄（xuan）の音の相似がもたらした勘違いである。⑥同考會試……正統十二年會試の同考官であった。⑦温州志……

『弘治』温州府志』卷十七「祥異・祥瑞」に見える。字句に若干の異同があるが、内容には関わない。⑧明倫堂……温州府学の講堂。当時の儒学(学校)の講堂は明倫堂と称するものが多い。典拠は、『孟子』滕文公上篇の「設爲庠序學校、以教之。庠者、養也。校者、教也。序者、射也。夏曰校、殷曰序、周曰庠、學則三代共之。皆所以明人倫也。」⑨庠士……生員の雅称。

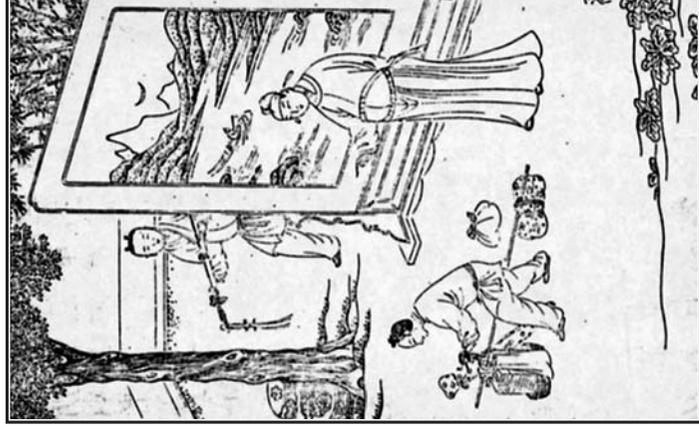
【補説】 図は、『温州志』の逸話をそのまま描いたものであろう。図の右上に内閣文庫の蔵書印が鈐されている。

### 状元施槃

正統四年己未 廷試、楊鼎等一百人、擢施槃第一。

按、施槃、字宗銘、直隸吳縣人。自幼警敏、甫成童、不屑就家人産業、奮然志於學、從父淮楊就師、久之嘆曰、歸而求之有餘師、尋補學生、領鄉薦、赴會試、作詩留別云、紅雲紫霧三千里、黃卷青燈十二時。咏胡蝶云、莫怪風前多落魄、三春應作探花郎。庚巳編戊午、吳縣學泮宮池、蓮一莖三花。巡撫周公忱見之曰、行有當之者。明年、槃以縣學生状元及第。

【校勘】 「楊」は、「陽」の誤りであろう。



正統四年(一四三九)、殿試に臨んだ士人は楊鼎(字は宗器、咸寧の人)等百人であり、施槃を第一位に選んだ。

考えるに、施槃は、字は宗銘、直隸吳県の人である。幼い時から明敏で、成長すると、家人の生業に付き従うのを潔しとせず、奮い立って学問に志し、父の命に従って淮陽に「行き」師についたが、しばらくすると嘆じて言った、「郷里に」帰って求めれば、有り余るほどの師がいるであろう。」と。間もなくして生員に取られ、郷試に合格して、会試に赴むくにあたり、留別詩を作って言った、「紅の雲と紫の霧に閉じ込められて、灯火の青い光のもと四六時中書物に向かった」と。蝶を詠じて言った、「風に吹かれて惨めな姿をさらすのは無理もないことだが、三度目の春にはきっと探花郎となるに違いない」と。

『庚巳編』「正統」三年、吳県の県学の池で、蓮が一莖に三つの花「をつけた」。巡撫の周忱公(字は恂如、吉水の人)はこれを見て言った、「ゆくゆくはこれに相当する者が出てくるであろう。」と。翌年、槃は県学の学生として状元で及第した。

【注】①甫成童……「成童」は、十五歳あるいは八歳。『礼記』内則「成童、舞象、學射御。」の鄭注に「成童、十五以上。」とあり、『春秋穀梁伝』昭公十九年「羈貫成童、不就師傅、父之罪也。」の范寧注に「成童、八歳以上。」とある。

②求之有餘師……『孟子』告子下篇に、「曰、夫道若大路然。豈難知哉。人病不求耳。子歸而求之、有餘師。」とある。③領鄉薦……「鄉薦」は、地方から人材を推挙することであり、「領鄉薦」とはつまり郷試に合格したことを言う。

④紅雲紫霧三千里……「紅雲紫霧三千里」とは、世俗との関係を絶って、仙人のような境遇で学業に励んだことを言うのであろうか。

⑤莫怪風前多落魄……（訓読）「怪しむ莫かれ風前に落魄多きを、三春應に探花郎と作るべし」なお、『元明事類鈔』卷四十「蟲豸門・蝶」「作探花」では、「風前」を「東風」に作る。

⑥庚巳編……卷九「瑞蓮」。ほぼ同文である。⑦泮宮池……「泮宮」は、周代の諸侯が設けた学校。天子の国学が四面に水をめぐらすのに対し、東西の門以南の半面にのみ水をめぐらすことからこう呼ばれた。『詩経』魯頌「泮水」に、「既作泮宮、淮夷攸服。」とある。後世、広く学校の雅称として使われる。

【補説】図は、学問に志し、父の命に従って淮陽に旅立とうとする場面か。『湧幢小品』卷七「密探状元」によれば、当初張和（字は節之、崑山の人）が状元となるはずであったが、臨軒の前に皇帝が密偵を放って調査させると、張は眼病であったので、二甲第一に下げ、代わりに、施槃を状元にしたという。

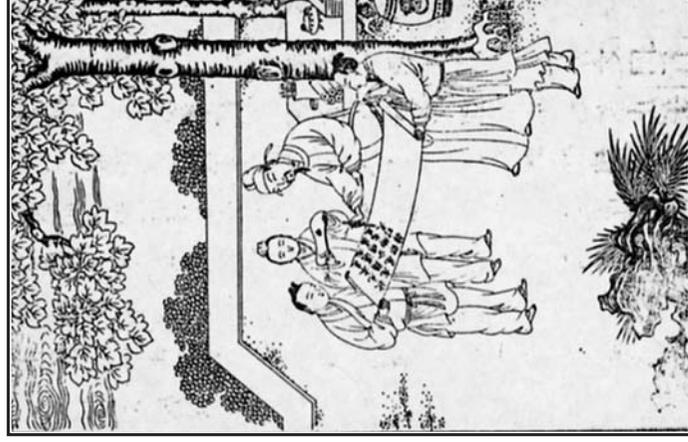
### 状元劉儼

正統七年壬戌 廷試、姚夔等一百五十人、擢劉儼第一。

按、劉儼、字宣化、號時雨、江西吉水人。年十六七、爲文根據義理、考聖賢言行之實、而力行之、二十四領鄉薦。赴春闈、乙榜不就、潛心林下二十六年、慨然有魁天下之志。自嘆曰、吾道宜可行矣。豈終不遇哉。正統壬戌、登春闈 廷對擢第一。時年四十九、授脩撰。以古文明天下。

汝南詩話劉文介儼、状元及第。有邵進者、在甲尾。劉嘗致柬於邵、自稱

年未<sup>註</sup>。或謂邵云、劉公笑子殿甲尾、故云然。邵怒曰、状元不是工夫上人做。我見劉必辱之。劉笑解之以詩云、状元本是龍頭選、龍尾分明屬邵卿、龍尾掉時天必雨、龍頭未必敢相輕<sup>註</sup>。邵聞之、亦解顏。



正統七年（一四四二）、殿試に臨んだ士人は姚夔（字は大章、桐廬の人）等百五十人であり、劉儼を第一位に選んだ。

考えるに、劉儼は、字は宣化、号は時雨、江西吉水の人である。十六七歳で、文章を作るのに人倫道德に依拠し、聖賢の言動の故実をしらべて、努めてそれを実行し、二十四歳で郷試に合格した。会試に赴き、乙榜に「挙げられるが」つかず、山林田野で二十六年間心を「学業に」潜め、発憤して天下の第一となる志を抱いた。「ある時」自ら嘆じて言った、「我が道を実践しなければならない。どうして不遇のまままで終われようか。」と。正統七年、会試に合格し、殿試では第一位に抜擢された。この時四十九歳で、修撰を授かった。古文で天下に名をあげた。

『汝南詩話』劉文介、儼は、状元で及第した。邵進（字は文升、新鄭の人）なる者がいて、「同年の殿試で」甲尾であった。劉はかつて邵に

手紙を送って、自ら「年末」と称した。ある人が邵に言った、「劉公はあなたが殿試の最下位であることを笑って、それでこのように言ったのだ。」と。邵は怒って言った、「状元は努力した人間になるわけではない。私は劉に会ったら必ずやあいつを辱めてやる。」と。劉は笑って詩によって誤解を解いて言った、「状元はもとより龍頭に選ばれた者(私)であり、龍尾は明らかに邵卿殿のことである、龍が尾を振ると天は必ず雨を振らせる、龍の頭が「龍尾を」軽んじることがありましようか」と。邵もこれを聞いて、破顔一笑した。

【注】①春闈……「闈」は貢院の別称。春(二月)に行われた会試を春闈と呼び、秋(八月)に行われた郷試を秋闈と呼んだ。②乙榜……前稿「曹竄」の注②参照。③時年四十九……『正統七年進士登科録』(天一閣明代科舉選刊)には、「年四十五」とある。④古文……文体の名。六朝の四六駢儷文に対して、先秦兩漢の散文のことを言い、また、後世それを模範にして唐の韓愈、宋の歐陽修等が提唱した文体を呼ぶ。明代においては、科挙の受験生が習得すべき必須の教養であった。⑤汝南詩話……『明史』卷九十九「藝文志四・文史類」に、「強盛汝南詩話四卷」、また、『千頃堂書目』卷三十二「文史類」に、「強盛汝南詩話一卷」とある。未見。⑥文介……劉儼の諡。⑦甲尾……甲榜(進士合格者)の尾、すなわちある科の最下位の意。⑧年末……進士同年の末尾の意と、同年の末輩という謙遜の意の両者があり、劉儼は後者の意味で使ったつもりが誤解された。⑨龍頭……状元の別称。⑩状元本是龍頭選……(訓詁)「状元は本より是れ龍頭の選にして、龍尾は分明に邵卿に属す、龍尾を掉る時天必ず雨ふらせば、龍頭は未だ必ずしも敢えて相軽せず」

【補説】図は、『汝南詩話』にいう「状元本是龍頭選云云」の詩を書く場面。

### 状元商輅

正統十年乙丑 廷試、商輅等二百五十人、擢商輅第一。

按、商輅、字弘載、號素菴、浙江淳安人。宣德乙卯、以書經發解。及會試弗利、乃入太學。李長爲祭酒見而器之、特設館東廂之後、俾卒業。及己丑會試 廷試、俱第一。時年三十二、授脩撰。

菽園雜記輅父嘗爲嚴州府史。輅生時、府公於夜間遙見吏舍有光、踪跡之、非火也。翌旦、問群吏家夜來有何事。云、商某生一子。府公異之、語其父云、此子必貴。宜善撫之。後舉三元、入內閣。天順初、罷歸。有醫善大素脈、診之云、歇祿十年、當再起。成化初、復起入閣。

夢徵錄輅嘗與其師洪士直、同宿學舍中。輅夢有提人首三顆授之。覺而語洪、洪曰、吉夢也。後三元應之。狀元記事輅父仲宣、方生輅、有以馮文簡中三元記餽之事、亦非偶矣。

【校勘】「己」は、「乙」の誤り。



正統十年(一四四五)、殿試に臨んだ士人は商輅等百五十人であり、商輅を第一位に選んだ。

考えるに、商輅は、字は弘載、号は素菴、浙江淳安の人である。宣德十年(一四三五)、『書経』で郷試に合格した。会試では合格できず、そ

れで国子監に入った。李長（伝未詳）が「この時」祭酒であり彼を見て才能を評価し、東廂の後ろに特別に館を設置して、学業を修めさせた。「正統」十年の会試と廷試でともに第一位となった。この時三十二歳であり、修撰を授かった。

『菽園雜記』輅の父（名は仲宣）はかつて嚴州府の役人であった。輅が生まれた時、知府が夜間、役人の館舎に光があるのを遙かに見て、それを追跡したが、火ではなかった。翌朝、役人達に昨夜家で何かあったかと問うた。「すると、ある者が」「商某に子供が一人生まれました。」と言った。知府はこれを不思議に思い、その（商輅の）父に語って言った、「この子は必ずや高貴となろう。しっかり慈しみ育てるがよからう。」と。後に三元に挙げられて、内閣に入った。天順の初めに致仕して「郷里に」帰った。太素脈「を診るの」が上手な医者が出て、彼を診て言った、「退休して十年たつと、きっと再び出仕するであろう。」と。成化の初め、再び起って入閣した。

『夢徵録』輅はかつてその師洪士直（名は弼、号は易軒、小溪の人、景泰二年進士）と学舎の中で同宿した。輅は、三個の首を引っ提げた人がそれを「自分に」授けてくれる夢を見た。目覚めてから洪に話すと、洪は言った、「それは」吉夢だ。」と。後の三元がその驗であった。

『状元記事』輅の父仲宣がちょうど輅を授かったとき、馮文簡が三元になったのを記念し祀ることがあった。やはり偶然のことではなかったのだ。

【注】①書經發解……「発解」とは、郷試に合格すること。『書經』は、商輅が郷試の第一場で選択した経書である。②會試弗利乃入太學……『明会典』卷七十七「会試」に、「永樂七年令、下第舉人、再試送國子監進學。其優等者、

仍賜冠帶、或加俸給、後令發回原學進業。」とある。③菽園雜記……卷十二。字句に若干の省略と異同が見られるが、文意に影響はない。④三元……前稿「許觀」の条参照。⑤太素脈……脈を診て人の吉凶寿命を占う術。「太素」は、その創始者である唐の隱者張太素の名に由来する。⑥夢徵録……未見。⑦状元記事……未見。⑧馮文簡……宋、江夏の人。名は京、字は当世、文簡は諡。郷試より殿試に至るまで全て第一位であった。⑨中三元記魁之事……具体的に何を意味するのかは未詳。

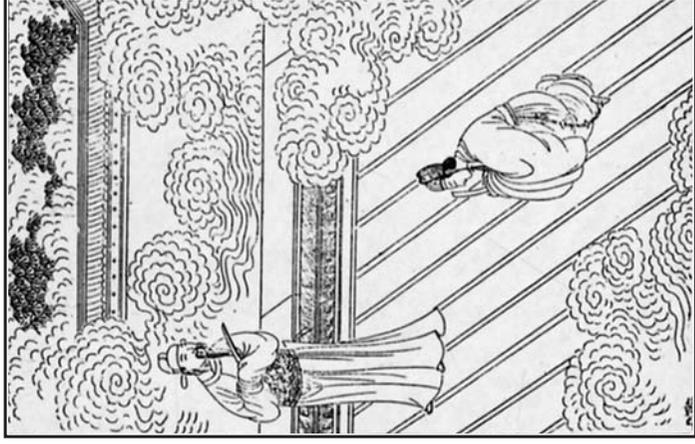
【補説】図は、『夢徵録』の内容をそのまま描いたもの。三個の首は、言うまでもなく郷試の首席、会試の首席、殿試の首席の兆である。

### 状元彭時

正統十三年戊辰 廷試、岳正等一百五十人。擢彭時第一。

按、彭時、字純道、號可齋、江西安福人。自幼端重寡言。年十九、從叔父愈憲憲副二公、學春秋。屬文、輒有驚人、語二公、以大名家期之。由儒士領鄉薦、入國學。博學精思、爲海内士人所推、年三十三舉進士。廷試擢第一、拜脩撰。年七十卒。彭文黨筆記丁卯冬、湖廣永濟縣官、在途夢聞黃榜、第一名、彭時監生。其官至京、言于永濟監生張端木。端木訪、知予姓名、駭甚。予聞之、答曰、夢中事何足信。又一人謂岳正曰、吾昨夜夢見魁、多士可賀。正曰、若夢可信、則已有人夢彭時作魁。何必我其人。戲曰、明年會試 廷試、有兩魁各占其一、可也。後果然。是時士夫中相傳童謠云、衆人知不知今年狀元是彭時、亦不知何自而起、後果驗。状元錄<sup>註④</sup>廷試前一月、上夢儒釋道三人來見。至揭曉<sup>註⑤</sup>、状元彭時由儒士、榜眼陳鑑<sup>註⑥</sup>幼寓神樂觀、探花岳正<sup>註⑦</sup>幼爲慶壽寺書記。幼年出處、皆形夢兆。豈偶然哉。天順日記<sup>註⑧</sup>状元彭時、當上表謝 恩<sup>註⑨</sup>之夕、坐至四鼓、乃隱几不寤、竟失朝、被劾。上惟命錦衣衛<sup>註⑩</sup>尋而已。可見、聖明倉

卒應變、而保全愛惜儒臣之心、至矣。状元退、就鴻臚習儀、大鴻臚疾言厲色、詰其悞事之由。状元舉止從容、唯唯謝過而已。此可見其量也。是科、年長而未室者五人。長洲陳鑑<sup>註</sup>二甲第二、年三十四、博陵劉吉<sup>註</sup>年三十二、襄陵邢讓<sup>註</sup>年二十二、懷安謝琚<sup>註</sup>年二十五、平越黃紱<sup>註</sup>、年二十六、俱未娶。奉化舒廷謨<sup>註</sup>以禮部辭事登科。



正統十三年（一四四八）、殿試に臨んだ士人は岳正（字は季方、号は蒙泉、郭県の人）等百五十人であり、彭時を第一位に選んだ。

考えるに、彭時は、字は純道、号は可齋、江西安福の人である。幼い時から落ち着いており寡黙であった。十九歳で叔父の僉憲公（名は琬）と憲副公（伝未詳）について『春秋』を学んだ。文章を書けば、その度に「それを見て」驚嘆した人々が、二公に「向かって」、「彼は」大変な名望家になることであろうと言った。儒士から郷試に受かって、国子監に入った。博学で思考が細密で、天下の士人の敬服を受け、三十三歳で進士に挙げられた。廷試では第一位に抜擢され、修撰を拜命した。卒年は七十であった。

『彭文憲筆記』「正統」十二年冬、湖広永済県の地方官が「旅行の」途上で見た夢の中で、黄榜が開かれると「第一名、彭時、監生」「とあった」。その地方官は京師に着くと、永済「出身」の監生張端木（伝未詳）に「そのことを」話した。端木が「ある日」訪ねてきて、私の姓名を知ると非常に驚いた。私はその話を聞き、答えて言った、「夢中のことがどうして信じるに足るでしょうか。」と。また、ある人が岳正に言った、「私は昨夜、貴兄が第一位になり、大勢の士人が祝福している夢を見ましたぞ。」と。正は言った、「もしも夢が信じられるなら、既に彭時が第一位になる夢を見た人がおります。どうして私がおのれ（状元）であると決めつけられましょう。」と。「そして」たわむれに言った、「来年の会試と殿試では、会元と状元を各自が一つずつ獲得することになればよいですな。」と。後にその通りになった。この時、若者達の間で、「このような」童謡が広まった、「皆の衆はご存じかい、今年の状元は彭時に決まりさ」と。どこから出たかは知らないが、後に果たして的中した。

『状元録』殿試の前の一月、皇帝は孔子、釈迦、老子の三人が会に來る夢を見た。合格発表が行われると、状元の彭時は儒士出身で、榜眼の陳鑑（字は緝熙、長洲の人）は幼い頃神樂觀に住んでおり、探花の岳正は幼時に慶壽寺の書記であった。幼年期の出目が、みな夢の中に兆として現れたのである。どうして偶然のことであろうか。

『天順日記』状元の彭時は、上表、謝恩の前の晩、四鼓（午前二時頃）になるまで坐し、なんと机に伏したまま目が覚めず、結局参内し忘れ、弾劾されることになった。「ところが」皇帝はただ錦衣衛に命じて尋問させただけであった。この上なく聰明なる皇帝は、とつさの出来事に臨機応変に対処し、しかも臣下をいつくしむ心をとことん全うされたこと

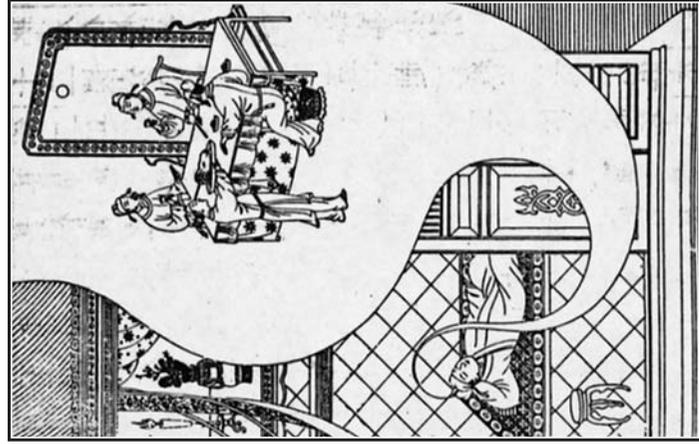
がわかるであろう。状元(彭時)は退いて、鴻臚寺において儀礼を習った。「その時」鴻臚卿は、声を荒げ顔をこわばらせて、過ちをしでかした理由を詰問した。状元は落ち着いたものごして、素直に過ちを詫びただけであった。ここにその器を見ることができよう。この科では、年齢が高くてもまだ妻がいない者が五人いた。長洲の陳鑑は一甲第二位で、三十四歳、博陵の劉吉(字は祐之、号は約菴)は二十二歳、襄陵の邢讓(字は遜之)は二十二歳、懷安の謝琚(字は仲玉)は二十五歳、平越の黃紱(字は用章)は二十六歳であったが、みなまだ娶っていなかった。奉化の舒廷謨(字は宗弼)は、礼部の弁事官から登第した。

【注】①由儒士領鄉薦……前稿「曾鶴齡」の注②参照。③彭文憲筆記……「張端木」を「張本端」に作るほか字句に若干の異同が見られるのに加え、文中二箇所にかんがりの省略がある。「駭甚」の後に、「數與明輩言之。時本端歷問爾同卿某文學何如。有人夢渠魁黃榜且記看驗之。予及庶膳見予道其語、且羃燈曰、惜乎太泄露了」が、また、「後果然」の後に、「夫科舉固前定。然於人何預。而見於夢如此、其理不可曉」が省略されている。④黃榜……殿試の順位発表の掲示。④状元録……『皇明歷科状元録』卷二。文章にはほとんど異同はない。⑤揭曉……合格発表のこと。⑥神樂觀……南京にあった道觀の名。⑦慶壽寺……未詳。⑧天順日記……未詳。李賢撰『天順日録』(一卷本)には見られない。⑨上表謝恩……一連の儀式は、『明会典』卷七十七「殿試」に、「明日、賜状元及進士宴於禮部。命大臣二員待宴、讀卷執事等官皆預。進士并各官皆簪花一枝、教坊司承應、宴畢、状元及進士赴鴻臚寺習儀。又明日、賜状元冠帶朝服一襲、諸進士寶鈔、人五錠。後三日、状元率諸進士上表謝恩。」とある。⑩錦衣衛……もともとは宮殿の近衛軍として護衛や儀仗等をつかさどったが、後には、刑獄や巡察緝捕をおさめて権力を振るった。ちなみに、『水東日記』卷十「彭状元失朝」には、「状元彭時謝恩、以夜坐久誤入朝被劾、上惟命錦衣衛尋而已、與他凡有劾皆即命速捕不同。」という。⑪鴻臚習儀……注⑨参照。鴻臚は、朝廷における祭事や儀礼の贊導を務めるのが主な職掌であつ

た。後の大鴻臚も鴻臚に同じ。⑫陳鑑……『正統十二年進士登科録』(天一閣明代科舉選刊)には、「聘錢氏」とある。⑬劉吉……『登科録』には、「博陵」ではなく、「博野」とある。また、「聘段氏」とある。⑭邢讓……『登科録』には、「聘梁氏」とある。  
【補説】図は、彭時が大鴻臚に詫びる場面を描いたものか。

### 状元柯潛

景泰二年辛未 廷試、吳滙等二百人<sup>註</sup>。擢柯潛第一。  
按、柯潛、字孟時、號竹巖、福建莆田人。生有奇質、數歲能詩。正統甲子年十五領鄉薦、不忍離親、不赴會試。景泰辛未中甲榜、廷試賜状元及第。状元記事<sup>註</sup>莆田學中泮池、於林環中状元時、開並頭蓮。是歲又開、潛應其兆。夢徵<sup>註</sup>潛嘗禱、夢九里廟<sup>註</sup>與貧友讌會。潛坐首席、須臾宰夫以一半頭獻於前。果以辛未状元、符羊頭之兆。



景泰二年(一四五二)、殿試に臨んだ士人は吳滙(字は会川、新喻の

人)等二百人であり、柯潜を第一位に選んだ。

考えるに、柯潜は、字は孟時、号は竹巖、福建莆田の人である。生まれながら類い希な素質が有り、数歳で詩が作れた。正統九年(一四四四)、十五歳で郷試に合格したが、親元を離れることに耐えられず、会試には赴かなかった。景泰二年に会試に合格し、殿試では状元及第を賜った。

『状元記事』莆田県学の泮池では、林環が状元になった時、一本の莖に二つの蓮の花が咲いた。この年にもまた咲き、潜がその兆に応じたのである。

『夢徴録』潜はかつて九里廟で「合格を」祈っていて、賓客、朋友と宴会を開く夢を見た。潜が上座に坐ると、ほどなくして料理人が一頭の羊の頭を「潜の」前にすすめた。果たして景泰二年科の状元は、羊頭の兆に符合したのだ。

【注】①二百人……『景泰二年進士登科録』(天一閣明代科学選刊)によれば、二百一人とするのが正しい。②甲榜……進士科、すなわち殿試を指すことが多いが、ここでは会試と考えた。③状元記事……未見。④夢徴録……未見。⑤九里廟……莆田にあった道観の名であろう。

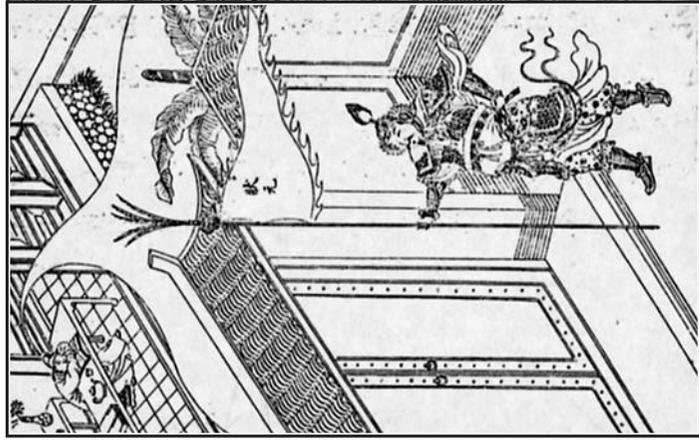
【補説】図は、『夢徴録』の内容を描いたもの。康熙年間の増補本では、全く異なる図が載録されている。

### 状元孫賢

景泰五年甲戌 廷試、彭華等三百四十九人<sup>註①</sup>。擢孫賢第一。  
按、孫賢、字元郷、河南杞縣人。菽園雜記<sup>註②</sup>賢赴會試、途中投宿一民家。主人敬禮甚隆、飲食一呼一具。賢疑其家有他會、問之、主人云、昨夜夢

状元至吾家。故治命以俟。今日公至、應此夢無疑矣。賢竊自喜。然、是科下第而歸、後一科果状元及第。瓊綴録<sup>註③</sup>孫賢面黑、徐溥面白、徐軫<sup>註④</sup>面黃。時謂鉄状元、銀榜眼、金探花。西湖志餘<sup>註⑤</sup>正統丁卯、海寧張靖之之母、夢老人書孫字於牆。其年靖之領郷薦。兩試春官、皆下第。辛未、靖<sup>註⑥</sup>※II禱於京城隍、夢登山。老人謂曰、此崑崙山也。驚寤、取禹貢織皮崑崙<sup>註⑦</sup>、研省紬繹。入場、果出此題、多爲所窘。桐郷楊青者、虎舎相近、來懇。靖之因爲開陳義意、詳述証跡。青遂登第、名第七、梓文一篇<sup>註⑧</sup>。靖之竟下第。後科甲戌、靖<sup>註⑨</sup>※II始登第。名亦第七、梓文一篇<sup>註⑩</sup>。其年状元乃孫賢也。母氏之夢、至是始驗。蓋已八年矣。惟織皮之夢、雖驗而虛、若爲楊青設者。然、靖之名第事實、一與青同、鬼神之示人、顯而隱如此。水東日記<sup>註⑪</sup>賢未登第之先、夢金甲神人、持黃旗插於其門。有状元二字。至廷試、果首擢。

【校勘】I「軫」は「鎭」の誤り。II『西湖遊覧志餘』により、「之」の字を補うべきである。



景泰五年(一四五四)、殿試に臨んだ士人は彭華(字は彦実、号は素

菴、安福の人)等三百四十九人であり、孫賢を第一位に選んだ。

考えるに、孫賢は、字は元郷、河南杞原の人である。

『菽園雜記』賢は会試に赴いた際、道中一軒の民家に泊めてもらった。主人はたいそう丁寧な礼でもてなし、食事をたのむとすぐに用意された。賢はその家には他の集まりでもあるのかといぶかって、尋ねてみると、主人が言うには、「昨夜、状元が我が家にやってくる夢を見ました。それで、準備をして「あなたを」待っていたのです。今日、あなたがやってきたのは、この夢に符合すること間違いありません。」とのことであった。賢は内心ひそかに喜んだ。しかるに、この科では下第して「郷里に」帰り、その次の科で果たして状元で及第した。

『瓊綴録』孫賢は顔が黒く、徐溥(字は時用、号は謙齋、宜興の人)は顔が白く、徐鏞(字は文軾、武進の人)は顔が黄色であった。時人は鉄状元、銀榜眼、金探花と言った。

『西湖志餘』正統十二年(一四四七)、海寧県の張靖之(名は寧、号は方洲)の母は、老人が「孫」という字を塀に書く夢を見た。その年に靖之は郷試に合格した。会試は二度受験するが、すべて下第した。景泰二年、靖之は京師の城隍廟に祈ると、大山に登る夢を見た。「夢の中で」老人が言った、「ここは崑崙山であるぞ。」と。驚いて目を覚ますと、「禹貢」を取り出し「織皮、崑崙」「の条を」じっくり調べて詳細に探求した。試験場に入ると、果たしてこの問題が出され、多くの者が苦しまされた。桐郷の楊青(字は士昂)なる者は、部屋が近かったので、「靖之のところに」やって来て「解釈を教えてくれるよう」懇願した。靖之はそこで「楊青」のために経文の意味を解説し、注疏を詳しく説明してやった。青はかくて合格し、順位は第七位で、「程文」一篇が「会試録」に」掲載された。「ところが」靖之は結局下第した。後の景泰五年科で、

靖之はやっと合格した。順位はやはり第七位で、「程文」一篇が「会試録」に」掲載された。その年の状元こそ孫賢であった。「張靖之の」母が見た夢は、ここではじめて符合した。つまり既に八年がたっていた。思うに「織皮」の夢は、符合する出来事はあったが間違っており、楊青のために設定されていたものごとくである。しかしながら、靖之の合格順位等の事実は、全く青と同じであり、鬼神が人に示現することからは、かくも明らかでかつ奥深いものなのだ。

『水東日記』賢がまだ登第する前のこと、金の鎧甲「を着た」神人が黄色の旗を持って彼の家の門にさし込む夢を見た。「旗には」「状元」の二文字が書かれていた。殿試になって、果たして状元に拔擢された。

【注】①三百四十九人……『景泰五年進士登科録』(天一閣明代科挙選刊)によれば、三百五十人とするのが正しい。②字元郷……『登科録』には、「字舜卿」とある。③菽園雜記……卷六。「治命」を「治具」に作る以外はほぼ同文。④瓊綴録……尹直撰『讐齋瑣綴録』に同文が見える。⑤西湖志餘……田汝成撰『西湖遊覧志餘』卷二十一「委巷叢談」に見える。内容に大きな相違は無いが、若干の省略が見られる。『西湖遊覧志餘』では、冒頭「海寧張靖之」の後に「赴省試」があり、「老人書孫字於牆」は「老人持筆如椽離毫天水缸、書孫字於牆上崇廣事堵」、「禱於京城隍、夢登大山」は「禱於京城隍廟、夢登海塘前有大山」に作り、「研省紬繹」の後に「因不復寐」があり、「多爲所登」は「是年書經舉人多爲所窘」、「來懇」は「謂靖之曰六題皆得旨、惟禹貢一題不能通」に作る。⑥京城隍……北京城の西の刑部街にあった都城隍廟。⑦禹貢織皮崑崙……『景泰二年会試録』(天一閣明代科挙選刊)によれば、この科の『書経』の第一題は、「禹貢」の「織皮崑崙、析支渠搜、西戎即叙」であった。⑧席舍……受験生が入る狭隘な個室。『明史』卷七十「選舉二」に、「諸生席舍、謂之號房。人一軍守之、謂之號軍。」とある。⑨名第七梓文一篇……『会試録』によれば、第七名は楊青であり、彼の答案は『書経』の第二

問 (俗語「予日以多子く作周字先」) のものが程文に採用されている。<sup>⑩</sup>名  
第七梓文一篇……『会試録』によれば、第七名は張寧であり、彼の答案は「策  
題」の第二問のものが程文に採用されている。<sup>⑪</sup>水東日記……巻六に見  
える。若干の文字の異同があるが、ほぼ同文である。

【補説】図は、『水東日記』に記す夢の内容を描いたもの。

### 状元黎淳

天順元年丁丑 廷試、夏積等二百九十四人。擢黎淳第一。

按、黎淳、字太樸、號樸菴、岳州華容人。 状元記事<sup>①</sup>二月初、淳方至京、  
禮部主司嫌其遲至<sup>②</sup>、拒之曰、少女作状元邪。淳應聲曰、此亦在吾輩也。

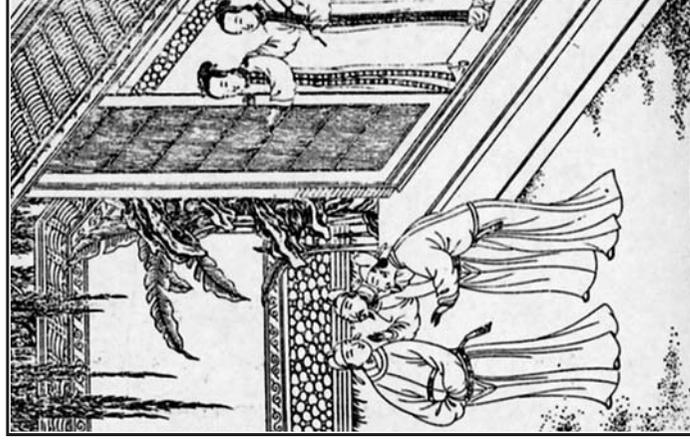
至邸、見壁間題畫、有昨夜簷前乾鵲噪、聲聲報道状元來<sup>③</sup>。此其識也。

義命錄<sup>④</sup>淳性淳厚、不事遊冶、自言絕跡青樓。會試入京、同輩欲戲之、使  
人先約妓曰、若遇吾輩同行、爾可呼黎淳。吾輩當至也。一日相邀過之、  
見一妓以手招呼曰、黎淳。黎淳。諸友哄然排之曰、予說不遊、此妓何由

知君姓名邪。淳不與辨、即口占曰、十里紅樓五里程、忽聞花底喚黎淳、  
状元本是天生定、故遣嫦娥報姓名<sup>⑤</sup>。雖談笑中、其自負如此。 七脩類藁<sup>⑥</sup>

黎状元淳、初至京將會試時、盤礴間、聞酒樓上有婦人喚其名。舉頭觀之、  
則妓也。乃知爲同輩所給。於是、登樓、吟詩曰、千里遨遊赴 帝京、忽  
聞樓上喚黎淳、状元自是天生定、先遣嫦娥報我名<sup>⑦</sup>。及 廷對、果登状元。  
時年三十四。此與義命錄所載事同略異、亦附錄之。

是科各省俱倍數取士<sup>⑧</sup>。進士未聘者四人、年長未娶者十人。



天順元年 (一四五七)、殿試に臨んだ士人は夏積 (字は孚英、吉水の  
人) 等二百九十四人であり、黎淳を第一位に選んだ。

考えるに、黎淳は、字は太樸、号は樸菴、岳州華容の人である。

『状元記事』二月の初めに、淳がようやく京師に到着すると、礼部の  
担当官は彼が遅れて到着したのを不満に思い、彼「の受験」を拒んで言っ  
た、「お前は状元になろうとでもいうのか。」と。淳は即座に答えて言っ  
た、「それこそ私の願うところです。」と。宿舎に着いて、壁に掛けられ  
た画の題詩を見ると、「昨晚は軒下のかささぎのやかましかったこと、  
声声に状元がやって来たと報せてさえずった」とあった。これはその識  
であったのだ。

『義命録』淳は性格が純朴で、遊蕩娛樂にうつつをぬかすことはなく、  
自ら妓楼に足を踏み入れたことなどないと言っていた。会試「のため」  
に上京した際、同行の友人が彼をからかってやろうと思い、人を遣って  
妓に予約を入れて、「もしも我々の一行を見つけたら、お前は『黎淳』  
と呼ぶがよい。「そうすれば」我々はきっと訪れよう。」と言い含めてお

いた。ある日のこと、「黎淳を」待ち受けてそこ（妓楼）を通りかかると、一人の妓女が手招きをして、「黎淳さん、黎淳さん」と呼ぶのが見えた。友人達は大笑いして彼を押し言った、「あなたは「妓楼で」遊ばないと言ったのに、この妓女はどうして君の名前を知っているんだい。」と。淳は弁解することなく、すぐさま即興で言った、「十里先の紅樓まで五里のところをやってくると、忽ち花の下から黎淳と呼ぶ声が聞こえる、状元はもともと生まれつきの定めであるから、それで「月に住むという伝説上の仙女」嫦娥を遣わして姓名を報せさせたのだ」と。談笑の中のこととはいえ、その自負たるやこれほどであった。

『七修類稿』状元黎淳が、初めて京師にやって来て会試に臨もうとした時、「ある日」あてもなくぶらぶらしていると、酒楼の上から女性が自分の名前を呼ぶのが聞こえた。顔を上げてその方向を見ると、妓女であった。そこで、仲間が「自分を」おとしいれようとしたものと気付いた。すると「彼は」楼に登り、詩を吟じて言った、「千里も遊歴して帝都に赴くと、忽ち楼の上から黎淳と呼ぶ声が聞こえる、状元はもともと生まれつきの定めであるから、先に嫦娥を遣わして私の名を報せさせたのだ」と。殿試では、果たして状元となった。その時三十四歳であった。これ（『七修類稿』の話）は『義命録』に載せる話と同じ事柄で「内容が」少々異なるので、これも附録しておく。

この科では各省ともに二倍の数の士人を取った。進士でまだ婚約していない者は四人、年長でまだ結婚していない者が十人いた。

【注】①状元記事……『皇明歴科状元録』巻二に引く『状元記事』では、「二月初」が「二月四日」になっている。②禮部主司嫌其遲至……「主司」の解釈には不安が残る。待考。「遲至」についても、具体的にどういう事態を言うの

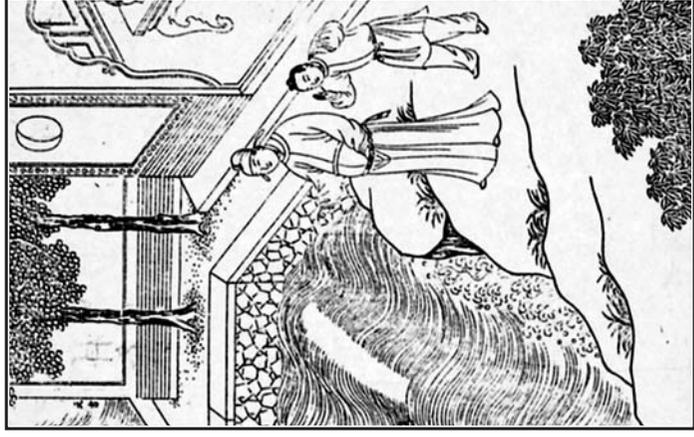
か未詳であるが、洪武十七年の「科挙成式」には、「凡郷試中式舉人、出給公據、官爲應付、廩給脚力、赴禮部印卷、會試就將郷試文字咨繳、本部照驗。」（『太祖高皇帝実録』巻百六十「洪武十七年三月戊戌朔」とある。受験前の手続きに遅れがあったということであろうか。③昨夜簷前乾鵲噪……（訓読）「昨夜簷前に乾鵲噪すし、声声に報せて連う状元来ると」④義命録……前稿「馬鐸」の条の「義命編」と同書か。未詳。⑤十里紅樓五里程……（訓読）「十里の紅樓五里の程、忽ち聞く花底に黎淳と喚ぶを、状元は本より是れ天生の定め、故に嫦娥を遣わして姓名を報せしむ」⑥七脩類稿……巻三十五「詩文類・状元詩讖」に見られる。「給」が「碎」になっているほか、語句に若干の異同があるが、文意に影響はない。⑦千里遨遊赴帝京……（訓読）「千里遨遊して帝京に赴くに、忽ち聞く楼上より黎淳と喚ぶを、状元は自ら是れ天生の定めなれば、先ず嫦娥を遣わして我名を報せしむるならん」⑧是科各省俱倍數取士……『明会典』巻七十七「郷試」に、「景泰」四年復定、取士額、南北直隸各增二十五名、浙江、江西、福建、河南、湖廣、山東各增二十名、廣東、四川、陝西、山西、廣西各增二十五名、雲南增十名。」とあるが、このことを指すのかどうか未詳。

【補説】図は、『義命録』の内容を踏まえる。妓女から名前を呼ばれ、友人達からひやかされる黎淳の様子。

### 状元王一夔

天順四年庚辰 廷試、陳選等一百五十六人、擢王一夔第一。  
按、王一夔、字大韶、號約齋、江西新建人。初赴試謁鏤柱宮、卜兆靈漱、水忽湧起如一字。亦第一名兆也。聞中今古<sup>註②</sup>初讀卷官、定祁順卷第一。既而司禮監<sup>註③</sup>問所定卷、閣老<sup>註④</sup>以姓名告。太監曰、此卷固出人一等。但傳臚時、此音與<sup>註⑤</sup>御名相似奈何。閣老愕然、乃以王一夔卷易之、而置祁二甲<sup>註⑦</sup>中。史隱<sup>註⑧</sup>錄一夔父王得仁、景泰間任汀州推官、值鄧茂七之亂<sup>註⑨</sup>。山谷嚮應、朝廷命將討之。主帥欲濫殺脅從以爲功、得仁力辨其枉、遇繫累于

道者、下車解其縛、焚其簿籍、所活千人。汀民德之、爲立生祠<sup>註</sup>。今人祀  
 典名曰、忠愛。至一夔狀元及第、官至尚書、人謂陰德之報。尚書張瑄  
 詩云、忠言極諫拯疲民、戮力勤王不顧身、百戰能緣王事烈、萬家因感使  
 君仁、春回瘴地棠陰滿、雨過山城草木新、子占大魁孫血食、皇天應不負  
 斯人<sup>註</sup>。



天順四年（一四六〇）、殿試に臨んだ士人は陳選（字は士賢、号は克  
 菴、臨海の人）等百五十六人であり、王一夔を第一位に選んだ。

考えるに、王一夔は、字は大韶、号は約齋、江西新建の人である。初  
 めて試験に赴いた時に鍊柱宮に参拝して、「宮前の」深い淵に「前途を」  
 占ったところ、水が突然一の字のかたち湧き上がった。第一位となる  
 予兆であった。

『間中今古』当初、読卷官は、祁順（字は致和、号は巽川、東莞の人）  
 の答案を第一位に決めていた。しばらくして、司礼監が「状元に」決定  
 した答案を尋ねると、閣老が「その」姓名を告げた。「すると」太監が  
 言った、「この答案は間違はなく衆人から一等抜きんでております。し

かし、伝臚の時に、この「祁順という」音と御名「の祁鎮という音」と  
 が似ているのをどうなさいます。」と。閣老は愕然として、そこで王一  
 夔の答案をこれ（祁順の答案）と取り替えて、祁を二甲の中に置いた。

『史隱録』一夔の父王得仁（名は仁、字が通行した）は、景泰年間に  
 汀州の推官に任じられ、鄧茂七の乱に遭った。「民衆は」各地でこれに  
 呼応して蜂起した。朝廷では將軍にこれを討伐するよう命じた。「その」  
 最高司令官は、手当たり次第に殺戮し脅して服従させ手柄をあげようと  
 したが、得仁は努めて無実の者を弁別し、道で捕縛された者に遇うと、  
 車を下りてその縛めをとぎ、彼ら（無辜の民）の名簿を焼き、多くの人  
 の命を救った。汀州の民はこのことを有り難く思い、「王得仁の」ため  
 に生祠を建てた。今では祭祀の対象であり、忠愛祠と呼ばれている。一  
 夔が状元で及第し、「その」官が尚書にまで至るに及んで、人々は陰徳  
 の報いだと言った。

尚書張瑄（字は廷爾、号は古愚、江浦の人、正統七年進士）の詩に言  
 う、「まことの言葉で厳しく諫めて疲弊した民を救い、力を合わせ天子  
 のために尽くして我が身をかえりみず、幾度も戦ってしっかり天子の功  
 業により従った、万の家々はそこで長官（王得仁）の仁に感じ入った、  
 春がめぐって南方暑熱の地にも棠の木陰は満ち、雨が通り過ぎて山城の  
 草木も新緑となった、その子は状元となり子孫が祭りを絶やすことはな  
 く、大いなる天もきっとこの人を見捨ててゐることはない」と。

【注】①鍊柱宮……南昌府城内にあった道観の名。②間中今古……黄溥撰  
 『間中今古録摘鈔』では、「此音」を「北方人音」に作るほか字句に若干の異同  
 が見られるが、文意に影響はない。③司禮監……宦官二十四衙門の筆頭。  
 ここでは、伝臚等の諸儀礼の打ち合わせのために参与しているものと思われる。

④閣老……『天順四年進士登科錄』(天一閣明代科挙選刊)に拠れば、この科の読考官は、吏部尚書兼翰林學士の李賢(字は原徳、文達は諡、鄧州の人)ほか至十名であった。ここにいう閣老とは李賢のことであろう。

⑤太監……提督太監のこと。宮廷内の儀礼等をつかさどった。⑥御名相似……祁順(ㄙㄩㄣˋ)の姓名と、英宗の諱祁鎮(ㄙㄩㄣˋ)の音が似ているため、唱名の際に、皇帝の御名を犯していると誤解される恐れがあった。

⑦置祁二甲中……『登科錄』に拠れば、第二甲第二名である。第一甲の三人と第二甲の第一名、第三甲の第一名の姓名は、唱名の際に読み上げられるが、第二甲第二名であればその可能性はない。

⑧史隱錄……未詳。⑨鄧茂七之亂……無頼の佃人鄧茂七が正統年間に起こした叛乱。鍾平王と偽称し二十余県を陥れた。朝廷は、丁瑄に命じて平定させた。『明史』卷百六十五の王得仁の本伝参照。

⑩立生祠……「生祠」とは、生きてい人物を祀った祠廟。『福建通志』卷十五「祠祀・汀州府」に、「忠愛祠、在郡治東。明天順間、奉旨建祀推官謝得仁。歲五月二日誕辰、有司致祭。」とある。

⑪忠言極諫拯疲民……(訓詁)「忠言もて極諫して疲れし民を拯い、力を戮わせ王に勤めて身を顧みず、百戦能く王事の烈に縁り、万家困りて使君の仁に感ず、春回りて瘴地に棠陰滿ち、雨過ぎて山城に草木新たなり、子は大魁を占めて孫血食し、皇天は応に斯の人に負かざるべし」

【補説】図は、王一夔の目の前で、鎮柱宮の池の水が「一」の字のかたち湧き上がる様子。

### 狀元彭教

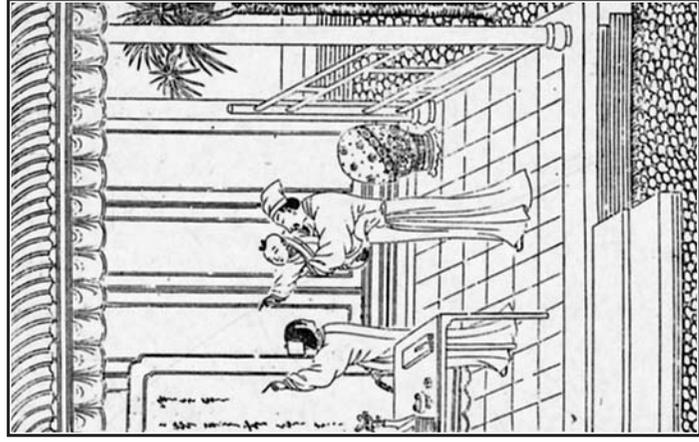
天順七年二月會試、場屋弗戒於火災、死者千餘人。上憐之、賜死者、俱進士。詔移試於秋、取吳鉞等二百五十人。至明年甲申三月、親策、唱名、是日不御殿、止傳策問。擢彭教第一。

按、彭教、字傅五、號東瀧、江西吉水人。同郡有彭文憲、時人稱大小狀元。教自幼穎悟出群。未能言時、父兄戲指齋堂題額語之、明日試問之、

即能歷指以復。四五歲、教之書、點畫不爽、口占韻語、輒成章。鄉試第一。越四年、會試中第二、廷試第一。時二十七歲。

菽園雜記本朝開科取士、鄉試以子午卯酉年秋八月、會試以辰戌丑未年春二月、蓋定規也。永樂癸未成祖渡江、天順癸未、貢院火。皆以其年八月會試、明年三月、殿試。故永樂二年、天順七年有甲申科。

【校勘】「鉞」は「鈇」の誤り。



天順七年(一四六三)二月の會試は、貢院が火災に対して無防備で、死者は千人以上を数えた。皇帝はこれを憐れみ、焼死者全員に進士を賜った。「また」詔して試験を秋にうつし、吳鈇(字は鼎儀、号は静逸、後に陸に改姓、崑山の人)等二百五十人を取った。明くる天順八年三月の親策と唱名「に当たっては」、当日「皇帝は」宮殿にお出ましにならず、ただ策問を伝達されただけであった。「殿試では」、彭教を第一位に選んだ。

考えるに、彭教は、字は傅五、号は東瀧、江西吉水の人である。同郡に彭時(既出)があり、時人は大小狀元と呼んだ。教は幼い時から衆人

から抜きんでて穎悟であった。また言葉を話せない時、父と兄がたわむれに齋堂の扁額を指さして彼に読み聞かせ、翌日試しにそれ(読み方)を問うてみると、即座に一字一字指さして答えることが出来た。四五歳で、彼に書を教えると、点や筆画に誤りはなく、適当に韻を与えると、たちどころに詩賦が出来上がった。郷試では第一位であった。「それから」四年をへて、会試では第二位になり、廷試では第一位となった。この時二十七歳であった。

『菽園雜記』本朝が科挙の制度で士人の採用を始めて以来、郷試は、子、午、卯、酉の年の秋八月に行い、会試は、辰、戌、丑、未の年の春二月に行うのが、制度上の決まりとなった。永樂元年(一四〇三)には成祖が江を渡り、天順七年には、貢院で火災が起こった。「それで」ともにその年の八月に会試、翌年三月に殿試「を行った」。だから、永樂二年と天順七年には申申料があったのである。

【注】①場屋弗戒於火災……この科の会試の火事の話は諸書に見られる。『皇明貢舉考』巻四に、「御史焦顯、因鎖其門、不容出入。死者數十餘人。焦頭爛額、折肢傷體者不可勝計。……」、『皇明三元考』巻六に、「二月、場屋災、試官越墻免、舉子焚死者九十餘人。」とある。焼死者の数については、「九十餘人」とする記録が多い。②上憐之……『万曆野獲編』補遺巻二によると、皇帝は当初焼死者に進士を賜うことを認めなかったと言う。「天順七年會試、科場遇火、焚死士子九十餘人、國子學正閻嵩錫請贈以進士、上切責不許。既而如其言、皆贈進士出身。上親制文祭之、斂其骸爲六大家、葬於朝陽門外、題曰、天下英才之墓。」③二百五十人……『天順八年進士登科錄』(天一閣明代科舉選刊)に拠れば、二百四十七人とするのが正しい。④親策……皇帝自らが策題を課すこと。実際に親策が出されることはまれであった。拙論「明代の「登科録」について」一二頁参照。但し、殿試の日、皇帝は奉天殿に出御することになっていた。『明會典』巻七十七「殿試」に、「至日、上御奉天殿、親賜策問。」とあ

る。⑤唱名……伝臚に同じ。⑥是日不御殿……『登科録』によれば、皇帝は奉天殿に出御せず、西角門で諸事を伝達したことがわかる。⑦二十七歳……『登科録』には、「年二十六」とある。⑧菽園雜記……巻二。「永樂癸未」が「洪武癸未」になっているほか、字句に若干の異同があるが文意に影響はない。なお、この部分に続いて、「貢院火時、舉人死者九十餘人。好事者爲詩云、『回祿如何也忘才、春風散作禮闈災、碧桃難向天邊種、丹桂翻從火里開、豪氣滿場爭吐焰、壯心一夜盡成灰、曲江勝事今何在、白骨樓臺漫作堆』至今誦之、令人傷感、或云蘇州奚昌元啓作。」という文章がある。⑨本朝開科取士……『皇明詔令』巻一「設科詔」に、「三年一次開試」とあり、「科舉成式」(『太祖高皇帝実録』巻百六十「洪武十七年三月戊戌朔」)に、「凡三年大比、子、午、卯、酉年郷試、辰、戌、丑、未年會試。」という。⑩永樂癸未成祖渡江……靖難の役のこと。

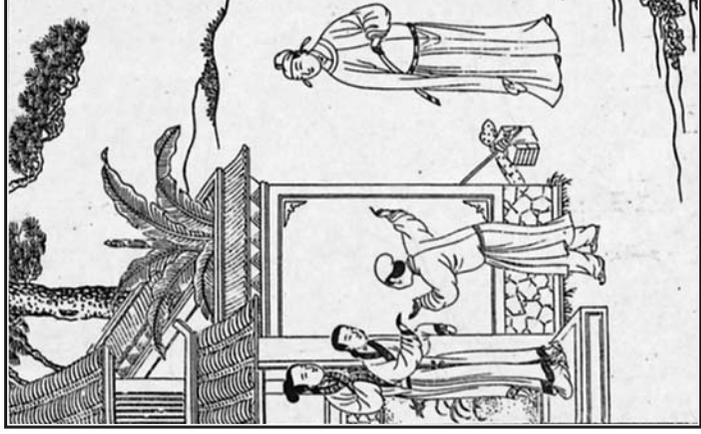
【補説】図は、幼時期の彭教が、父と兄の前で題額の文章の内容を指さして復誦する様子。

### 状元羅倫

成化二年丙戌 廷試、章懋等三百五十三人、擢羅倫第一。

按、羅倫、字彝正<sup>註①</sup>、號一峰、江西永豐人。少勵志聖賢之學、嘗曰、舉業非能壞人、人自壞之耳。郡守張瑄嘉其學行、而惜其貧乏、命有司周之、謝弗受。年三十六、中禮闈試<sup>註②</sup>。對策 大廷、頃刻萬言、不屬草。中引程正公語<sup>註③</sup>、人主一日之間、接賢士大夫之時多、親宦官宮妾之時少、執政欲節其下句、倫不可。直聲震於時。王家宰一變<sup>註④</sup>、以敏政卷字精楷、力贊于李文達前曰、宜爲第一。李曰、論文、不論書、取羅倫第一。卒年四十有八。狀元記事<sup>註⑤</sup>倫赴試時、有一水手夢中與語之。曰、明日附舟、乃羅狀元。明日、果有秀士來附舟。詢其姓、則是。衆皆驚訝。狀元全考<sup>註⑥</sup>倫之僕、途獲金環、命歸本婦。石田羅彝倫赴春闈、道蘇州、爲文謁范文正

公<sup>註</sup>祠。是夕、舟中夢文正、遺之詩曰、賜帶橫腰重、宮花壓帽斜、勸君少飲酒、不久臥烟<sup>註</sup>霞。狀元奇異<sup>註</sup>編<sup>註</sup>倫至省<sup>註</sup>邸、梁墜一軸、歎<sup>註</sup>書報<sup>註</sup>狀元。果驗。



成化二年（一四六六）、殿試に臨んだ士人は章懋（字は徳懋、号は闇然子、晩号は穀浜遺老、蘭谿の人）等三百五十三人であり、羅倫を第一位に選んだ。

考えるに、羅倫は、字は彝正、号は一峰、江西永豊の人である。若くして奮い立って聖賢の学問に志し、かつて、「挙業が人を駄目にするのではなく、人自らが挙業を駄目にしてしまうのだ。」と言った。知府の張瑄（既出）はその学問品行を褒めるとともに、彼が貧乏なのを憐れみ、役人に命じて支援させようとしたが、「羅は」辞退して受けなかった。三十六歳で、会試に合格した。殿試の対策では、ただちに方言「の文章をものし、草稿を作らなかつた。〔対策の〕中に程正公の語、「人主は一日の間に、賢士大夫と接する時間が多く、宦官や宮女に親む時間が少なくなければならない」を引用すると、執政はその下句を削らせよう

としたが、倫はきかなかつた。正言直行の名声は当世にとどろいた。王一夔（既出）尚書は、程敏政（字は克勤、号は篋墩、休寧の人）の答案が文字が精美端正であることから、李賢（既出）に向かつて、第一位にすべきですとつとめて推薦した。李は、「文章を評価するのであって、書を評価するのではない。」と言ひ、羅倫を第一位に取つた。卒年は四十八歳であつた。

『状元記事』倫が試験に赴いた時、一人の船頭が夢の中で彼と話をした。「彼は」言つた、「明日舟に乗るのは、羅状元だ。」と。翌日果たして生員がやつて来て舟に乗つた。「船頭が」その姓をたずねると、これ（羅）であつた。衆人はみな驚き訝つた。

『状元全考』〔会試に赴く際〕倫の下僕が、道中で金の耳輪を手に入れたが、「羅は」持ち主の婦人に返させた。

『石田雜纂』倫が会試に赴くとき、蘇州を通過し、祭文を作って范文正公の祠に参拝した。その夕べ、舟の中で文正公の夢を見た。「公は」彼に詩を贈つて、「賜つた玉帯は腰にすしりと重く、賜つた金花は帽を斜めに圧している、どうか君少しばかり酒を飲みたまえ、ほどなく雲霞の中に臥すような心地とならう」と言つた。

『状元奇異編』倫が宿舎に到着すると、梁から一幅の巻物が落ちてきて、「それには」〔状元を報ず〕と書かれていた。果たしてその通りとなつた。

【注】①字彝正……『成化二年進士登科録』（天一閣明代科举選刊）には、「字應魁」とある。②禮闈……会試は礼部が主宰したため、礼闈と称された。

③程正公語……程正公とは、程頤（字は正叔）のこと。『二程塾言』（『二程全書』巻四十一）「君臣篇」に、「今夫一日之間、接賢士大夫之時多、親寺人宦

官之時少、則氣質自化德器自成。」とある。④執政欲節其下句……『登科錄』に載録する羅倫の「対策」には、この語自体が見られない。あるいは謄卷官が削除したのであろうか。⑤王家宰一夔……『登科錄』に拠れば、この科の謄卷官は、吏部尚書兼華蓋殿大學士の李賢ほか全十二名であった。王一夔がこの時、どういう立場で関与したのかは未詳。なお、程敏政は、この科の榜眼であった。⑥状元記事……未見。⑦秀才……秀才、すなわち生員の雅称。『礼記』王制篇「命鄉論秀士、升之司徒、曰選士。」とあるのに基づく。⑧状元全考……この引用だと話は簡略に過ぎるが、『皇明歷科状元録』卷三に引く『義命編』には、もっと詳細な記述がある。「倫、以天順癸未、赴試春闈、暮宿邸舍。其家奉水盥濯盆中有金環一隻。羅僕取之。明日早行謂僕曰、此去京城尚遠、計日已不及矣。又缺路費、如之何。僕曰、公無憂。夜來于盆中獲一耳環。足以爲贖。倫怒索其環返而還之。比至、則其婦、爲夫所逼欲捐生矣。返其環、感謝不已。」⑨石田雜纂……沈周撰『石田雜記』を見ると、字句に若干の異同があるが文意に影響はない。⑩爲文謁范文正公祠……范仲淹の祠は、蘇州府内の東北范氏義宅の東にあった。⑪賜帶橫腰重……(訓読)「賜わりし帯は横腰に重く、宮花は帽を庄して斜めなり、君に勸む少しく酒を飲め、久しからずして烟霞に臥さん」⑫状元奇異編……この引用も簡略であるが、『皇明歷科状元録』卷三に引く『義命編』には、「成化丙戌、倫與同邑劉忠同赴春闈。因至遲、舍館盡爲他人有之、覓一暗室、塵垢繞梁、方掃除、忽梁上墜一軸。舒視之、模糊莫辨。細拂去其塵、圖有一枝梅上棲雙鶺鴒、歎書報狀元三字。羅懷之至揭曉、二人皆登第、倫則狀元也。果驗。」とある。⑬省邸……待考。⑭敬書……落款、識語。

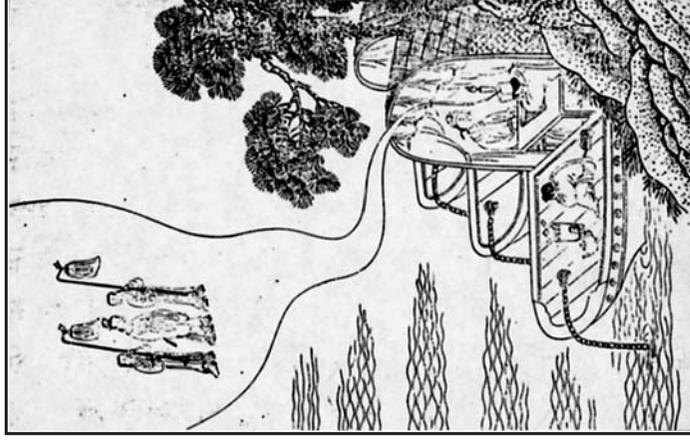
【補説】図は、『状元全考』の内容を描いたもの。

### 状元張昇

成化五年己丑 廷試、費閻等二百四十七人、擢張昇第一。

按、張昇、字啓昭、號栢崖、江西南城人。於傳臚前一夕、夢登天。兩手掣二人頭云、皆同姓者。及開榜、一甲首張昇、二甲首張燧、三甲首張曉。

客坐新談<sup>註①</sup>昇父同赴京會試。舟近小姑山下<sup>註②</sup>、天色已暮。因泊舟。父夢山上數女郎、執絳紗燈<sup>註③</sup>、擁仙姑而下。因問之曰、仙姑何往。曰、張昇狀元舟在此、往訪之。覺而呼昇、語其事。是科廷試果首選。



成化五年（一四六九）、殿試に臨んだ士人は費閻（字は廷言、号は補菴、丹徒の人）等二百四十七人であり、張昇を第一位に選んだ。

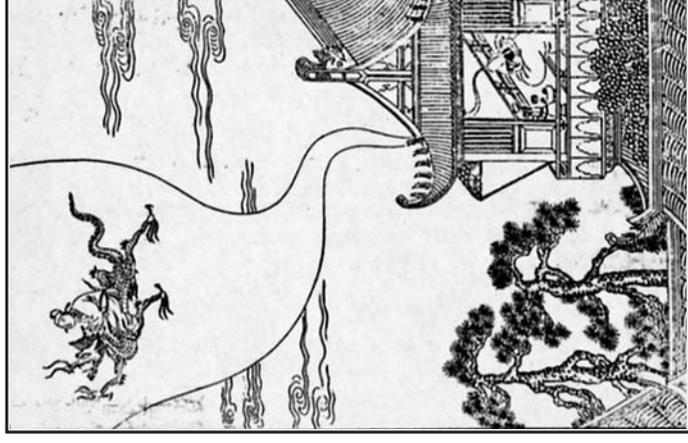
考えるに、張昇は、字は啓昭、号は栢崖、江西南城の人である。「昇は」伝臚の前のある夕べ、天に昇る夢を見た。両手には二人の首を引っ提げており、「その首は」どちらも「彼と」同姓だということであった。合格順位の発表が行われると、第一甲の第一位は張昇で、第二甲の第一位は張燧（字は廷佩、安邑の人）で、第三甲の第一位は張曉（字は光曙、号は静菴、三原の人）であった。

『客坐新談』昇の父は、「昇と」一緒に会試のため京師に赴いた。舟が小姑山の麓に近づくと、空は既に暮れていた。そこで舟に泊まった。「その夜」父は山上に数人の若い女性が、うす絹の灯籠を持って、仙女を取り囲んで下りてくる夢を見た。そこで、彼女らに、「仙女はどこに

行かれる。」と問うと、「張昇状元の舟がこの地に来ているので、それを訪ねて行くのです。」と言った。「父は」目を覚ますと昇を呼び、そのことを話した。この科の殿試では果たして第一位であった。

【注】①客坐新談……文章に若干の異向があるが文意に影響はない。②小姑山……小孤山のこと。江西省彭沢県の北、安徽省宿松県の東に在り、彭蠡湖の大孤山に対して小孤山と称された。俗に小姑とも呼ばれた。③絳紗燈……薄絹を縫い合わせて作った灯籠。

【補説】図は、『客坐新談』の内容を踏まえ、張昇の父の夢の中に、仙女が現れた場面を描いたもの。



成化八年（一四七二）、殿試に臨んだ士人は呉寛等二百五十人であり、呉寛を第一位に選んだ。

考えるに、呉寛は、字は原博、号は匏菴、直隸長洲の人である。生まれつき飛び抜けた素質があり、十一歳ですぐに生員となった。二十九歳で貢生として国子監に入り、三十四歳で郷試に合格し、三十八歳で進士に登第した。府学に在学時は、様々な書物を博覧し、古文を書けば、老成した風格があった。武功伯の徐有貞（初名は理、字は元玉、号は天全、呉県の人）は、高邁「な性格」で己を屈して他人と交わることがまれであったが、「その彼が」「翰林学士の器である。」と言った。歳貢生として国子監に入学すると、張弼（字は汝弼、号は東海、華亭の人、成化二年進士）が彼を見て、「天下にまたこれほどの貢士がいようとは。」と言った。「しかし」何度も郷試を受けるが合格せず、官僚になる道をあきらめようとしたが、提学御史の陳選（既出）が、礼を厚くして送り出してくれたので、やむを得ず郷試を受験すると、第二位で合格した。会試は第一位で、殿試でもまた第一位であった。卒年は七十であった。

### 状元吳寛

成化八年壬辰 廷試、吳寛等二百五十人、擢吳寛第一。

按、吳寛、字原博、號匏菴、直隸長洲人。生有異質、年十一即爲學生。二十九應貢、赴禮部<sup>註①</sup>、三十四而擧於鄉、三十八而登進士。在庠校時、博覽群籍、爲古文詞<sup>註②</sup>、有老成風格。武功伯徐有貞、高邁少許可折節與交、曰、館閣器也。以歲貢貢入太學<sup>註③</sup>、張汝弼見之曰、天下亦有如此貢士乎。屢擧不第、絕意仕進、董學御史陳選、以禮敦遣、不得已入鄉試、名在第一位<sup>註④</sup>。會試名第一、及廷試又第一。卒年七十。庚巳<sup>註⑤</sup>成化辛卯、蘇州府學池、連二莖三花。明春有甘露降於學之桃樹、兩月吳文定爲<sup>註⑥</sup>状元。近峰聞<sup>註⑦</sup>略<sup>註⑧</sup>人言吳文定及第、素無夢兆。惟揭榜前三日、異香滿室耳。公嘗謂予言、會試之前、夢過國學、適陰雲四合、大雷電欲雨、龍下攫其中、併其身而上。遂驚寤焉。

『庚巳編』成化七年、蘇州府学の池で、蓮が一本の茎に三つ花を咲かせた。翌年の春には、甘露が府学の桃の木に降り、二箇月後に、呉文定が状元となった。

『近峰聞略』ある人の言うことには、呉文定が及第した際には、もともと夢の中の予兆はなかった。ただ合格発表の三日前に、不思議な香りが部屋に満ちただけであった。公はかつて私にこう言った、「会試の前、夢の中で国子監を通りかかると、折しも四方が黒雲に覆われ、大きな雷が鳴って雨が降りそうになり、「すると、空から」龍が降りてきて私の頭巾をつかんで、私の身体と一緒に「空に」舞い上がった。そこで驚いて目が覚めた。」と。

【注】①應貢赴禮部……貢生として国子監に送られたことを言うであろう。生員入監の制度の概略は、『明史』卷六十九「選舉一・学校」に、「貢生入監、初由生員選擇、既命各學歲貢一人、故謂之歲貢。其例亦屢更。洪武二十一年定、府、州、縣學以一、二、三年爲差。二十五年定、府學歲二人、州學三歲三人、縣學歲一人。永樂八年定、州縣戶不及五里者、州歲一人、縣間歲一人。十九年令、歲貢照洪武二十一年例。宣德七年復照洪武二十五年例。正統六年更定府學歲一人、州學三歲二人、縣學間歲一人。弘治、嘉靖間、仍定府學歲二人、州學二歲三人、縣學歲一人、遂爲永制。……歲貢之始、必考學行端莊、文理優長者以充之。其後但取食廩年深者。」と言う。②古文詞……古文で書かれた文章。劉儼の注④参照。③館閣……北宋の時代、史館、集賢院、昭文館、及び秘閣、龍圖閣、天章閣等、優秀な学者が入り書籍の管理や校訂、国史の編修等をつかさどった官庁の通称。明代ではその職掌を翰林院が務めたので、つまりは翰林院のことを指す。④歲貢貢人太學……「歲貢」は歲貢と同義であろう。つまり、歲貢生として国子監に送られたことを言う。⑤董學……擧學と同義であるとみなした。⑥名在第二……『成化八年進士登科録』（『明代登科録彙編』）には、「應天府鄉試第三名」とある。⑦庚巳編……卷九。字句に

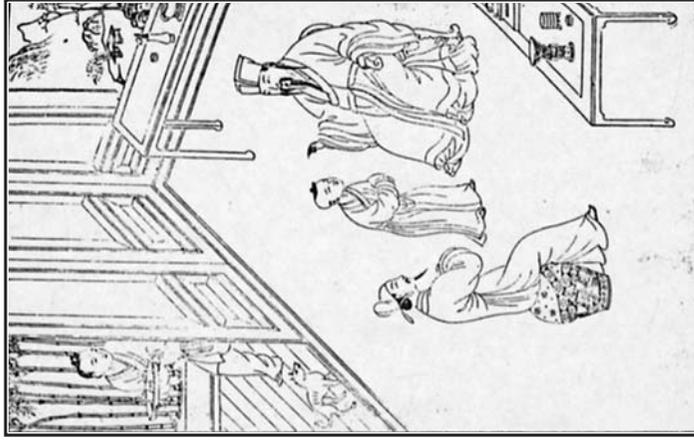
若干の異同があるがほぼ同文。⑧文定……呉寛の諡。⑨近峰聞略……未詳。皇甫鼎撰『近峰記略』（二卷本）には見られない。⑩揭榜……合格者名簿を貼り出すこと。⑪國學……国子監のこと。

【補説】図は、『近峰記略』の内容を踏まえ、龍の背にのつて空を飛ぶ夢を見る呉寛の姿を描いたもの。

### 状元謝遷

成化十一年乙未 廷試、王鏊<sup>註①</sup>等三百人、擢謝遷第一。

按、謝遷、字于喬、號木齋、紹興餘姚人。大父新構宅成、甫遷、公生。遂以名。七歲能屬對。大父曰、蛙鳴水澤、爲公乎、爲私乎。對曰、馬出河圖<sup>註②</sup>、將治也、將亂也。甚奇之。一日客語曰、白犬當門、兩眼錚錚、惟顧主。即應曰、黃蜂出洞、一心耿耿、只隨王。治禮經鄉試第一<sup>註③</sup>。廷試對策、明白正大、得告君之體<sup>註④</sup>。臚傳、陞引<sup>註⑤</sup>、上見儀貌脩潔、氣宇凝重、甚喜。公卿<sup>註⑥</sup>以下、皆知其爲遠大之器。歸時年七十有九、年八十三卒。贈大師、諡文正。



成化十一年（一四七五）、殿試に臨んだ士人は王鏊（字は濟之、呉県の人）等三百人であり、謝遷を第一位に選んだ。

考えるに、謝遷は、字は于喬、号は木賁、紹興餘姚の人である。祖父（名は壘）が新しく邸宅を構えたのが落成し、引越すとすぐに公が生まれた。そこで「遷と」名づけた。七歳で対句を作ることが出来た。祖父が、「蛙が水辺で鳴くのは、公のためか、私のためか。」と言うと、「遷は」応じて言った、「馬が河図を出すのは、治めようとするのか、乱れさせようとするのか。」と。「祖父は」非常に有能な子だと思った。ある日、客人が語って言った、「白い犬が門を守って、両眼を光らせて、じっと主を見守っている」と。「謝遷は」すぐに応じて言った、「黄色い蜂が洞を出て、一心に誠を尽くして、ひたすら王について行く」と。『礼記』を修めて郷試では解元になった。殿試の対策は、率直かつ堂々とした内容で、天子に告げる上奏文の文体が整っていた。伝臚と陞見の際、皇帝は「彼の」外貌が高尙かつ清らかで、心構えが厳肅であるのを見て、非常に喜んだ。公卿以下、みな彼が将来有望な大器であることがわかった。帰郷した時に年は七十九歳であり、八十三歳で卒した。太師「の位を」贈られ、諡は文正であった。

【注】①王鏊……この科については、当初王鏊の評判が高かったが、商輅が王鏊に三元の栄着で並ばれることを嫌って、順位を下げさせたという指摘が諸書に見える。例えば、『響斎瑣錄』に、「商閣老三試首榜。及乙未、讀卷官有應首選者。商嫌並己、遂下其手焉。蓋指會元王鏊也。觀此、則鏊之不爲三元有自矣。」とある。真偽のほどは定かではない。ちなみに、王鏊はこの科の探花。

②河圖……古代中国の伝説上の帝王伏羲の時代に、黄河から現れた龍馬の背にあったという図。易の卦のもとになったとされる。③治禮經郷試第一……明代の餘姚は、『礼記』学習の一大中心地であり、謝氏一族の家学も『礼記』で

あった。拙論「明代餘姚の『礼記』学と王守仁―陽明学成立の背景について―」（『東方学』第二一輯 二〇〇六）参照。④告君之體……「告君之體」については、『伊川先生文集』五（『二程全書』卷六十三）の「答人亦奏草書」を参照。⑤陞引……「陞見」と同義に解した。⑥公卿……伝臚に会した諸々の高官を指すであろうが、あるいは大学士のことを言っているのかもしれない。

【補説】図は、客人の前で巧みに対句を作ってみせる幼少期の謝遷の様子。

### 狀元曾彦

成化十四年戊戌 廷試、梁儲等三百五十人。擢曾彦第一。

按、曾彦、字士美、江西泰和人。質樸坦易、穎悟過人。經書子史、窮探力索、必有得而後已。故屢躓場屋、志不稍挫。夢徵黻彦爲諸生時、夢被人懸其髮於明倫堂大梁上。平生自負甚重、每以大魁自期。然、見黜於有司者、七舉矣。既而歲貢南雍、始中郷試、又連屈禮闈。年逾知命、始中大魁。先後幾三十年矣。廷試時、執政欲矯時弊、救文以質。以彦所對簡約、遂置首選。在館中、年雖長、退異如後學。連考禮闈、號得人。陳舊沴扣闕論事甚切。

義命編彦每試、輒夢袖中龍頭筆一枝、手取之、則筆入肉弗得。至成化戊戌、夢取此筆、出之、文彩焜耀、儼一龍在手、果狀元及第。



成化十四年(一四七八)、殿試に臨んだ士人は梁儲(字は叔厚、号は厚齋、晩号は鬱洲、順徳の人)等三百五十人であり、曾彦を第一位に選んだ。

考えるに、曾彦は、字は士美、江西泰和の人である。質朴かつ率直な人柄で、人並み優れて穎悟であった。経書や、子部、史部の書について、とことんまで調べて探求し、必ずや自得するまで止めなかった。それで、何度も科挙で失敗を重ねたが、いささかも志がくじけることはなかった。

『夢徴録』彦が生員だった時、ある人から自分の髪の毛を明倫堂の大きな梁の上かけられる夢を見た。日頃から強い自負心を抱き、常に自ら状元を期待していた。しかしながら、七度も試験官に退けられた。「その後」しばらくして南京国子監の歲貢生となり、始めて郷試に合格したが、また続けざまに会試に下第した。五十歳を過ぎて、やっと状元で及第した。その間およそ三十年が過ぎていた。殿試の時、執政は時弊を矯正し、質実「な文風」によって浮華を正そうと思った。彦の対策は簡にして要を得ていたので、そこで状元に据えた。「修撰として」翰林

院にいる間、年長者ではあったが、後進の者のように謙虚であった。連続して会試の考官を務めた際には、人材を得たことを称賛された。国家の災厄について意見を述べ、官衙の重要事について論ずること、甚だ切実であった。

『義命編』彦は試験のたびごとに、袖の中に一本の龍頭の筆があつて、それを手に取ろうとすると筆は内側に入つて取れない、という夢を見た。成化十四年になつて、夢でこの筆を取り、それを「袖から」出すと、美しく光り輝く、荘嚴な一龍が手中にあつた。果たして状元で及第した。

【注】① 磨墮場屋……「場屋」は科挙の試験場のことで、ここでは転じて、科挙試験そのもののことを言う。② 夢徴録……未見。③ 明倫堂……既出。

④ 南雍……南京の国子監。「雍」は、辟雍、すなわち古代中国で天子が建てた大学のこと。『礼記』檀弓篇に、「大學在郊、天子曰辟雍。」とある。⑤ 年逾知命……『成化十四年進士登科録』(天一閣明代科挙選刊)には、「年五十四」とある。

⑥ 執政欲矯時弊……『登科録』によれば、この科の読巻官は、吏部尚書兼勳身殿大学士万安ほか全十四名である。ここにいる「執政」というのが具体的に誰を指すのかは未詳。⑦ 在館中……状元は及第後、翰林院修撰に任じられた。⑧ 蕪診扣闕……この部分の読み方がよくわからない。待考。

⑨ 義命編……未見。

【補説】図は、下第を繰り返しながらも、自負を失わず、自若としている様子を描いたものか。

### 状元王華

成化十七年辛丑 廷試、趙寛等三百人、擢王華<sup>⑩</sup>第一。

按、王華、字德輝、號龍山、浙江餘姚人。華家素貧。嘗訪親於杭、同舟有五庠生講論。華哂之。庠生怪問、華破其講非是。衆初甚忽之、及聞其

言、遂加敬、延於家教授。四方爭延講禮經<sup>註②</sup>。偶書宋朝家法、過漢唐八事<sup>註③</sup>于廟、及殿試、命是題。敷衍詳悉、擢第一。官至禮尚書、致仕。子守仁、封新建伯<sup>註④</sup>、封父如其爵。年七十七卒。狀元奇異編<sup>註⑤</sup>先夢迎春郭外衆兒白牛、鼓吹至華家。解者曰、狀元、春元也。金色白、其神爲辛<sup>註⑥</sup>。牛之屬丑<sup>註⑦</sup>。先生、其辛丑狀元乎。後果然。



成化十七年（一四八一）、殿試に臨んだ士人は趙寛（字は栗夫、号は半江、呉江の人）等三百人であり、王華を第一位に選んだ。

考えるに、王華は、字は德輝、号は龍山、浙江餘姚の人である。華の家はもともと貧しかった。かつて杭州に親戚を訪ねた際、同じ舟に五人の生員がいて議論をしていた。華は「その内容を聞いて」彼らのことを笑った。生員達は訝って「理由を」尋ねると、華はその講説の間違いを説破した。彼らは最初は彼を非常に軽んじたが、その言葉を聞くうちに、敬意を抱くようになり、「自分たちの」家に招いて教えを受けた。「その後」各地で争って「王華を」招いては「礼経」を講じてもらった。たまたま扇面に「宋朝の家法が、漢唐を過ぎることの八事」を書いたところ、

殿試になって、それが出題された。「その内容を」詳細に敷衍して、第一位に抜擢された。官は礼部尚書にまで至って致仕した。子の守仁は、新建伯に封ぜられ、父「である華」もその爵位を封ぜられた。七十七歳で卒した。

『状元奇異編』以前、立春を迎えた際、大勢の人々が城外で白「の土」牛をかつぎ、太鼓や笛を鳴らしながら華の家にやってくる夢を見た。夢解きをする者が言った、「状元とは、春の元です。金の色は白で、その神は辛です。牛の属は丑です。先生は、何と辛丑科の状元でしょうぞ。」と。後に果たしてその通りになった。

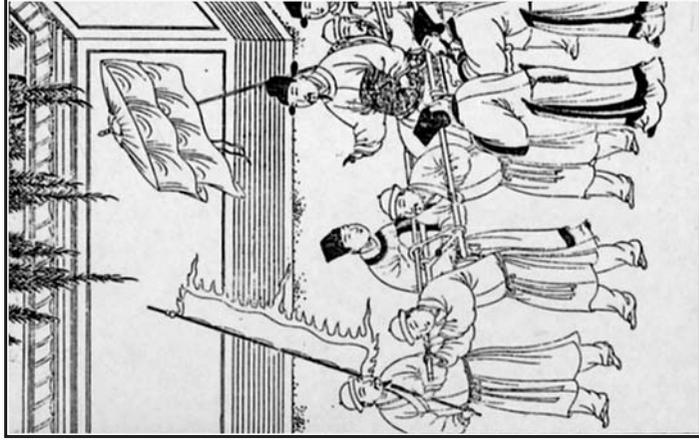
【注】①三百人……『成化十七年進士登科録』（天一閣明代科考選刊）により、二百九十八人とするのが正しい。②四方争延講禮經……王華は当時、『礼記』学の大家として名をとどろかせていたことが伺える。③偶書宋朝家法……『登科録』に載せる「制策」には、「至宋則大綱正、萬目未盡擧、似於唐不及。然又謂其家法、有過漢唐、足以致太平者八事。……」の語が見られる。なお、『七修類稿』卷四十二「元題有教」には、殿試の前に、華が同郷の王珣の家で出題をのぞき見たという話がある。④子守仁封新建伯……子の守仁とは、すなわち明の大儒王陽明のことである。寧王宸濠の乱を平定した功績により、新建伯に封ぜられた。⑤状元奇異編……未詳。因みに、『玉堂叢語』卷六「科目」にもっと詳しい話がある。⑥状元春元也……殿試は春の三月に行われたので、その首席すなわち初めということで「春元」となる。⑦金色白其神爲辛……辛は十干の八番目で、陰が起り始める時であり、五行では秋にあたる。そこから、金、白という属性が出てくる。⑧牛之屬丑……丑は十二支の二番目で、その属性は、五行では土、動物では牛になる。

【補説】図は、諸所に招かれて行き、「礼書」を講じた王華の姿を描いたものであろう。

### 状元李旻

成化二十年甲辰 廷試、儲罐等三百人、擢李旻第一。

旻、李旻、字子陽、號東崖、浙江錢塘人。爲諸生有才名。當庚子大比、不利於有司。時科試已遍、旻擁典學之輿而言曰、解元尚未與取數、若遺才之路不開、場中安得有解元也。主司許之、果登解元。後四年登狀元。時年三十九。狀元記事會試後、面色紫黑、多謂晦滯。遇一僧相曰、烏龍罩紫殿薦必首。此則相人神矣。



成化二十年（一四八四）、殿試に臨んだ士人は儲罐（字は静夫、号は柴墟、泰州の人）等三百人であり、李旻を第一位に選んだ。

考えるに、李旻は、字は子陽、号は東崖、浙江錢塘の人である。生員の時からすぐれた才能と名望があった。「成化」十六年の郷試に際しては、「科考で」合格させてもらえなかった。郷試が既に目前に迫っていた時、旻は提学の「乗った」輿をかついで言った、「解元となる人材はまだ「提学が科考で選んだ」郷試受験資格者の中には取られていません。もしも遺才の道が開かれなければ、郷試でどうして解元を出せましょう。」

と。提学がこれ（郷試受験）を許すと、果たして解元で合格した。四年後には状元及第した。この時三十九歳であった。

『状元記事』会試の後、顔色が紫黒いので、よくない運勢だと言う者が多かった。一人の僧に会うと、「彼の」人相を見て言った、「黒龍を紫霧が覆っておる、殿試ではきっと首席じゃろう。」と。これぞ相術が神に入るといふことである。

【注】①大比……郷試の年のこと。『明史』卷七十「選舉二」に、「三年大比、以諸生試之直省、曰郷試。」とある。②不利於有司……この有司とは提学のことであろう。提学官は各地方を回って、生員が郷試に参加する資格を得るための試験である「科考」を「歲考」と交互に定期的に行つた。『明史』卷六十九「選舉一・郡県之學」には、「提學官在任三歲、兩試諸生。先以六等試諸生優劣、謂之歲考。一等前列者、視廩膳生有缺、依次充補、其次補增廣生。一二等皆給賞、三等如常、四等撻責、五等則廩、增遞降一等、附生降爲青衣、六等黜革。繼取一二等爲科舉生員、俾應郷試、謂之科考。其充補廩、增給賞、悉如郷試。其等第仍分爲六、而大抵多置三等。三等不得應郷試、撻黜者僅百一、亦可絕無也。」とある。③科試……「科考」と同義で使われることもあるが、ここでは科考（郷試）の意。④典學……提学官のこと。⑤取數……科考で郷試の受験者に採用すること。⑥遺才……生員が郷試に参加するには科考で合格する必要があるが、それ以外に提学が特別に才能のある者を拾って郷試への参加を認めた特例のこと。⑦果登解元……この科の解元は当初王華のはずであったが、試験官が王華が生員ではなく儒士であることを嫌って、順位を入れ替えたという話が伝わる。例えば、『皇明三元考』卷七には、「時、考官取王華爲首、監臨謝御史嫌華白衣、乃更旻而王華爲第二。王李相繼中状元。可謂知人矣。」という。⑧状元記事……未見。⑨烏龍罩紫……待考。

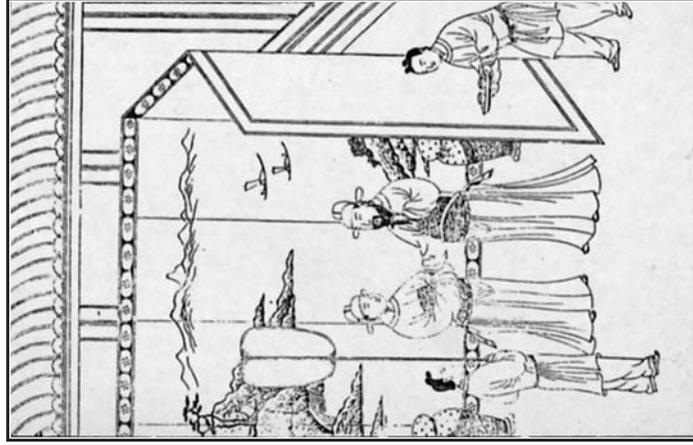
【補説】図は、輿に乗った提学に対して郷試の受験を認めてくれるよう頼み込む李旻の様子を描いたものであろう。

### 状元費宏

成化二十三年丁未 廷試、程楷等三百五十一人、擢費宏第一。

按、費宏、字子充、號健齋、江西鉛山人。少而秀異、長負文名。年十六、與季叔瑞同領鄉薦。年二十、<sup>註①</sup>廷試第一。居官一月、以例得封、親如己官。其伯父瑄、亦以是月封其親職兵員外、父子一時並荷恩數人、尤異之。

客坐新聞<sup>註②</sup>寧遠劉良、中丙子鄉試、十赴春闈不利。凡試、必徧訪學人、姓費、名宏者、久不得。丁未聞有鉛山費宏、至其邸飲酒、沾醉撫掌、大笑曰、今科狀元必子。吾三十年前、夢神告曰、汝登進士、費宏作狀元。累科覓子不見、今得之。遽 廷試、宏異首選。良中三甲<sup>註③</sup>。良夢時、宏猶未生。鄉試時、考官閱卷、恍惚夢總角童子謂、此少年狀元也。遂以其卷置高等。及赴鹿鳴<sup>註④</sup>、儼如夢中之貌。靳文僊<sup>註⑤</sup>貴序曰、公甫冠、登狀元、四十五入內閣、在位多匡正、卒以不合去。自國初至今、狀元拜相者有矣、有年如公者乎。禮七十致仕<sup>註⑥</sup>、或年邁猶未謝去、有去如公者乎。如公者有矣、有年與才德如公者乎。



成化二十三年（一四八七）、殿試に臨んだ士人は程楷（字は正之、号は念齋、樂平の人）等三百五十一人であり、費宏を第一位に選んだ。

考えるに、費宏は、字は子充、号は健齋、江西鉛山の人である。若い時から格別優秀で、長じてからは文声を有した。十六歳で、叔父の瑞（伝未詳）と一緒に郷試に合格し、二十歳で殿試の第一位となった。官職に就くこと一月にして、「推恩の」例により爵封を受け、親族も自分と同じように封贈を受けた。彼の伯父瑄（号は復菴）もまたこの月に兵部員外郎の職に任せられ、その親族も封贈を受けた。父子が同時であり、一緒に恩恵をかたじけなくする者が数人であるというのは、極めて珍しいことであった。

『客坐新聞』寧遠の劉良（字は質臣）は、景泰七年（一四五六）の郷試に合格したものの、十度も会試に赴いたが合格出来なかった。「ある理由があつて」毎回の試験で、必ずあまねく学人を訪ねたが、姓が費、名が宏という者には、長いこと会えなかった。「成化」二十三年に鉛山の費宏という者がいるのを耳にして、その宿舎を訪れ酒を飲み、存分に酔っぱらうと手をたたいて、大いに笑つて言った、「今科の状元は必ずやあなただ。私は三十年前、夢で神のお告げを聞いたんだ、『そなたは進士に合格し、費宏が状元になる。』と。何科もあなたを探し求めたのに会えなかったが、今会うことが出来た。」と。殿試に及んで、宏は果して状元であった。良は三甲で及第した。良が夢を見た時、宏はなおまだ生れていなかった。郷試の時、考官が答案を審査した際、うつらうつらしていると夢の中で総角の童児が、「これは少年の状元だ。」と言つた。そこでその答案を上位に置いた。「考官が」鹿鳴宴に赴いたところ、「費宏は」まるで夢の中の「少年の」顔そのままであった。靳貴（字は充道、号は戒菴、丹徒の人、弘治三年進士）の「序」に言う、「公は弱冠で状元及第し、四十五歳で内閣に入り、在職中「様々な不正を」糾弾し正したが、結局「周圉と」うまくゆかず「職を」去った。国初から今

に至るまで、状円で宰相を拜命した者はいたが、公のように多年にわたった者がいたであろうか。礼では七十で致仕するというが、年老いてもなおまだ辞去しない者はいたが、公のように「潔く」去ったものはいたであろうか。公のような者がいたにしても、「在職の」長さと才徳が公ほどの者がいたであろうか。」と。

【注】①年二十……『成化二十三年進士登科録』（天一閣明代科学選刊）には、「年二十二」とある。ちなみに、費宏より年少で進士となった者は、明代を通じて少なからずいるが、状元になった者はいない。②居官一月……『状元録』では、「居官二月」になっている。なお、『明憲宗実録』巻二百八十九によれば、この年の四月に、皇太后に「聖慈仁寿皇太后」の尊号がおくられている。

③客坐新聞……待考。『状元録』に引く『状元記事』では、「年十六赴省試、考官閱卷恍惚見總角童子謂、此乃少年状元也。遂以其卷置高等。及赴鹿鳴、儼如夢中之貌。弱冠果魁天下。」となっている。④三甲……『登科録』によれば、第八名であった。⑤鹿鳴……郷試が終わった後で、合格者のために開かれた宴会のことを鹿鳴宴と呼んだ。⑥斲文僖賞序……『戒菴文集』（『四庫全書存目叢書』集部第四五冊所収）巻八「鵝湖先生費公序」に見られる。字句に少なからぬ異同はあるが、文意に影響はない。⑦自國初至今状元拜相者……『科名盛事録』巻五「状元宰相」には、洪武庚辰科の胡広から万曆癸未科の朱国祚まで十二人の名を挙げる。三度入相したのは彼だけであるが、年数では高輅と彭時の十九年には及ばない。⑧禮七十致仕……古来、礼学においては士は七十歳で致仕すると規定する。『礼記』曲礼上に、「大夫七十而致事。」とある。

【補説】図は、叔父の費瑄と同時に爵封を受け、喜び合う様子を描いたものか。あるいは、『客坐新聞』の内容を踏まえたものか。なお、本文最後の四文字（如公者乎）は、底本では双行小字になっている。

【附記】本稿は、平成二十年度科学研究費補助金（文部科学省特定領域研究）「東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成——寧波を焦点とする学際的創生——」（領域代表：東京大学・小島毅）の（A 01-02）「中国科举制度からみた寧波士人社会の形成と展開」（研究代表者：早稲田大学・近藤一成）による研究成果の一部である。

